愛国学園大学人間文化研究紀要　第20号　47～56頁　2018年３月

〔論文〕

『西東詩集』:「ズライカの巻」について（Ⅱ）

鈴　木　邦　武

「ズライカの巻」の11番目の詩は「銀杏（イチョウ）」と題されている。先ずこの題についてであるが、ゲーテは＜GINGO BILOBA＞としている。≪Brockhaus Enzyklopädie≫では＜Ginkgo＞、＜Ginkgobaum＞と、Wahrigの≪Das grosse deutsche Wörterbuch≫では＜Ginkgo＞、＜Ginkjo［ginkjo］＞となっていて、これは明らかに日本語の「銀杏［ギンキョウ］」に基づいていると考えられる。「イチョウ」は中国原産の樹木であるが、古くから日本にもたらされ神社や寺の庭に植えられ、火に強く、火災にあっても枯死しない性質があるので大木に育っているといわれている、また、街路樹としても利用されている。この詩が制作される以前に「イチョウ」をヨーロッパに伝えたのは長崎出島のオランダ商館の医師として来日したエンゲルベルト・ケンペルであるとされている。それがフランクフルトの辺りに伝えられたものであろうと思われる。1978年の時点でも若い木であつったが、ハイデルベルクの城の庭にも1本植えられていた。ゲーテは一枚の葉でありながら2枚のように見えるイチョウの葉に興味を覚えたのである。「イチョウ」はドイツ語で＜Fächerblattbaum＞（扇型の葉を持つ木）という表現もある。

銀杏（イチョウ）

東方からわが庭に託された
この木の葉は
知者を感動させるような
深い意味を味あわせてくれる

これは自ら分かれた
一枚の生きたものなのだろうか
一枚のものに見えるように
選びぬかれた2枚なのだろうか

そのような問いにこたえるために
私は具合良く正しい意味を見出した
私の歌にあなたは感じないだろうか
私は一つであって二つであると[1)]

ゲーテ自身が清書したものの中で日付けが記されているように「1815年9月15日」[2)]の作と考えられる。フランクフルトとゲルバーミューレに滞在している時のものである。

第1節目でこの詩集の大きなテーマである東西の結びつきについて語られる。「東方か

らわが庭に託された」のなかの東方は日本と、わが庭とはヨーロッパと解してもよいだろう。

このイチョウの扇型をした葉は真中に亀裂が入っていて、一枚の葉が2枚のようにも見え、2枚の葉が一枚になっているかのようにも見える。それが「知者を感動させるような深い意味を味あわせてくれる」というのだ。二つであることと一つであることの同時性、分かれていることと結びついていることの同時性の中に自然の普遍的な法則性を感じ取ることの作者の視点は「色彩論」の中の次のような表現にも見受けられる。

「自然の忠実な観察者は、たとい考え方にさまざまな違いがあっても、次の点では相互に一致するであろう。すなわち、目に見えてくるものはすべて、現象としてわれわれが遭遇するものはすべて、合一可能なもともと分裂したものあるいは分裂に到達し得るもともと合一したものを暗示しなければならなず、また、そのように現われなければならないと言う点で。一つになったものを二つにすること、二つになったものを一つにするということは自然のいのちである。これは永遠の収縮と弛緩であり、永遠の分裂と結合であり、われわれが生き、活動し、存在する世界の吸入であり、吐出である。」[3)]

ゲーテはこの一枚でありながら二葉に見える「イチョウ」の葉の中に自然の摂理を感じ取っている。人の生命もそれに包摂される。ゲーテはこの「イチョウ」の葉を、そしてそれを歌ったこの詩をマリアンネに贈っている。「わたしたちも一つなのです」という思いを込めて。

12番目の詩には題は付されていなく、ズライカとハーテムの対話になっている。

ズライカ

おっしゃってください、あなたは沢山の
詩をお作りになったのでしょう
そのあなたの詩を多くの方々に差し上げ
たのでしょう
あなたの手で美しく書き上げ
点と線まで完成させて
飾り立てを誇るような幾つもの詩集を
あなたがそれを差し向けるところでは常
に
それはきっと愛のあかしだったのです

ハーテム

そうなのです。極めて優美な視線から
微笑を伴なううっとりとした様子から
目がくらむほど鮮明な歯並びから
麝香の香りを漂わせる巻毛のヘビから
数え切れない危険が押し寄せました
でも考えてみてください。そんなにも長
い間
ズライカが予告されていたのです。[4)]

ゲーテ全集のミュンヒェン版（M.A.）の＜Divan-Jahre 1814-1819＞にあるこの詩の末尾に＜22.S.15＞とあるので、制作日は1815年9月22日であると推察される[5)]、この日にはゲーテはハイデルベルクに滞在していた。

また、マリアンネは1856年4月5日付けのヘルマン・グリム宛の手紙の中で、「ディヴァーンの中で東風と西風の詩のほかには、多分『あなたの愛をうけてこよなく幸せ』と『おっしゃってください、あなたは沢山の詩をお作りになったのでしょう』以外に私の身に覚えのあるものはありません」[6)] と書き送ってい

るので、この詩のズライカが語る部分はマリアンネの作を元にしているのであろうと推測される。

マリアンネは幼い頃から舞台に登場していて文芸にも関心をもっていたので、ゲーテのことは早くから知っていて憧れのようなものも感じていたようである。そんな彼女だからゲーテを回る女性達のことも知っていたのではなかろうか。この詩のズライカが語る部分はそのようなことが根底にあったものと思われる。そのズライカの嫉妬も込められた問いかけを巧みに利用してハーテムは「そんなにも長い間ズライカが予告されていた」と応える。

また、ハーテムの語る部分の4行目に「麝香の香りを漂わせる巻毛のヘビ」とあるが、恋人の魅力を巻毛で表現するという仕方はハーフィズにも度々見受けられる（「花園の中央からかの巻毛の香りがただよう」[7]、［彼女の黒い巻毛の災いは未だ終わらない］[8]、「私は恋人の巻毛の奴隷」[9]）。このことについては、ゲーテ自身も「注と論考」の中の「形象的表現から比喩への移行」の項で次のように取り上げている。

「われわれは巻毛と戯れる詩人と度々出くわす

おまえの髪の一つ一つの巻毛に
五十以上の釣針が掛かっている

という句は美しいふさふさした巻毛の頭に向けられていて極めて好もしく感じられる。想像力は髪の毛の先端が鉤のようになっている様子を何の抵抗もなく受け入れることが出来る。しかし詩人が自分は髪に吊るされていると述べると、それは適切に心に適うということにはならない。それどころかサルタンについて

あなたの巻毛のリボンの中に
敵の首が絡み合わされている

となったら、それは想像力に不愉快なイメージを与えるかあるいはなにも与えることにはならない。」[10]

ゲーテは『ハーフィズ詩集』を携えて郷里への旅に出立したのであった。

次の13番目の詩も同じ日に作られた。題はなくズライカとハーテムの対話になっている。

ズライカ
日が昇ります、なんという荘厳な光景でしょう
三日月がそれを抱きしめるようにとりかこんでいます
誰がこのような一組を結び合わせることが出来たのでしょうか
この謎はどのように明かすのでしょうか、どのように？

ハーテム
それはスルタンが出来たのです、彼は
最高の世界の一組をめあわせたのです、
選ばれたもの、忠実なものたちの中の
もっとも勇敢なものたちを顕彰するために

またこれを私たちの喜びのしるしとしましょう

もう再び私とあなたの姿がみえます
恋人よ、私をあなたの太陽と名づけてください
いとしい月よ、おいで、私を抱きしめておくれ[11]

西の空に三日月が傾いていて、そこに太陽が燦々と輝く光景が思い浮かぶ。ここでマリアンネが三日月が太陽を抱きしめるように包み込むと述べており、ハーテムも「私をあなたの太陽と名づけてください/いとしい月よ私を抱きしめておくれ」と述べているように、ハーテム（男性）は太陽に、ズライカ（女性）は月に喩えられている。[12] そこでハーテムはズライカに抱きしめられることを願っている。

ズライカの「どのように」との問いかけに対してハーテムはトルコのスルタンを持ち出す。トルコの国旗は、他のイスラーム国と同様に、三日月と星をあしらった図柄になっている。スルタンはこの国旗の図柄に倣った勲章を作成して、忠実なものたちの中の最も勇敢なものたちに与えて、顕彰したのであろう。マリアンネは1824年3月2日付けの書簡の中でゲーテがフランクフルトに滞在していたころのことを懐かしく思い起して当時トルコの商人から「月の勲章」を大詩人に献上したいと言われて、それを持ち帰ったことを記述している。[13] また、この書簡の編集者Hans-J Weitzによるとこの書簡の中で「月の勲章」と呼ばれているものは見たところ紙のようなもので作られており、三日月が上から覆うようになっている下に放線を放つ太陽を思わせるものがしつらえられているもので、この勲章は今でもゲーテ博物館に陳列されているとのことである。[14]

14番目の詩にも題は付されておらず、対話の形にもなっていないが、ハーテムからズライカに向けてのものである。

おいで、恋人よ、さあ私にターバンを巻いておくれ
ただあなたの手によってのみターバンは美しくなるのです
イランの最高位にあったアッバースですらこれ以上に優美に頭を巻いてもらったことはなかったのです

アレクサンドロスの頭から美しく輪になって下がりおちていた
リボンだってターバンだったのです
そして後に続くその外のすべての君主にも王の飾りとして気に入っていたのです

われらの皇帝を飾っていたのもターバンです
ひとびとは王冠と呼びますが、名前は消えていくもの
宝石、真珠があれば、目をうっとりさせるでしょうが
もっとも美しい装いは常にモスリンです

ですからここにあるほんとにきれいな銀の筋いりのこのモスリンを
愛する人よ、頭に巻いてください
いったい支配者とはなんでありましょう、よく分っています
あなたが見つめてくれれば、わたしはそれに劣らず偉大なのです[15]

「ヴィースバーデン目次表」では「ターバ

ン(Tulbend)」と題され、1815年2月17日の作である。[16)]

ところでこの年の8月2日にズルビッツ:ボワスレーがヴィースバーデンに居たゲーテのもとに来てその時から10月9日までゲーテと共に暮らすことになる。8月4日にゲーテは彼に『西東詩集』に収められる予定の詩を幾つか朗読して聞かせているが、上の詩もその中に含まれていたようである。そしてマリアンネもこの詩について知っていたものと思われる。8月28日のゲーテの誕生を祝う催しがゲルバーミューレのヴィレマー家の別荘で行われた際に、マリアンネとヴィレマーの先妻との間の娘ロゼッテ・シュテーデルがゲーテのために極めて上品なインド産のモスリンを月桂樹の枝で編んだ冠やパイナップル、メロン、モモ、イチジク、ブドウなどの上等な果物で充たした2つの駕籠、美しい花束などと共に用意したことが伝えられている。[17)]

『西東詩集』にはターバンを取り上げた詩が幾つかあるがこの詩の中ではハーテムにとっては愛する人の手になるターバンがどんな王侯のものにも優ることを表明している。

15番目の詩にも題は付されていない。

私が望むものは僅かしかない
なぜなら何もかも気に入っているから
それにこの僅かなものも、なんと長く
すでに世間は快く私に与えてくれていることか

度々私は酒場の中に心地よく
狭い建物の中でも明るい気持で座っている
だがひとたびあなたのことを思うと
私のこころは征服するように広がる
ティムールの帝国と
その支配的な軍隊をあなたに従わせます
バダフシャーンはあなたにルビーを
カスピ海はトルコ石を献上するでありましょう

太陽の国ブハラからは
蜜の甘さの乾燥した果物を
それからサマルカンド産の絹の用紙に書いて
愛情込めた沢山の詩を

オルムスからあなたのために指示したものを
あなたは喜びを持って読むことになりましょう
そして取引のすべては
なんとあなたを喜ばすためにのみなされることか

ヒンドスタンのきらびやかさが
ウールや絹のうえに咲き誇るようにと
バラモンの国ではあなたのために
なんと無数の指が努めてたことか

そうだ、愛する人を讃美するため
スメルプールの渓流が掘り返され
土、砂礫、漂礫、玉石などから
ダイヤモンドが洗浄されました

大胆な男たちの潜水夫の群が
真珠の宝を湾内で掻き集め
それらをあなたのため鋭利な精通者の群れが
連につらねるために努めました

そしてバスラが最後で
香辛料と乳香を添えてくれれば
キャラヴァンは世間の人々を楽しますもの
すべてを
あなたのもとへ運んで来ます

しかしこのような皇帝の富すべては
ついには眼を混乱させるだけ
真に愛し合っている心は
相手の中にのみその幸せを感じるのですから[18]

ミュンヒェン版（M.A.）の＜Divan-Jahre 1814-1819＞に収められているこの詩の末尾に＜17 März 17 May 1815＞[19] とあるのでこの詩の完成は何日かかけられていると思われる。「ヴィースバーデン目次表」では「皇帝の贈物」となっている。

この詩の中ではオリエントの状況について様々に語られているが、ゲーテはオリエントに関することを知るために当時ヴァイマルに居て手に入れることの出来る情報を殆ど得ていたと言っても良い。そのことについては、「注と論考」の「ピエトロ・デラ・ヴァレ」、「オレアーリウス」、「タヴェルニエとシャルダン」、「近年の旅行者及び最近の旅行者」、「恩恵を受けた人、亡くなった人と存命中の人」、「フォン・ディーツ」、「フォン・ハマー」の項目の中で語っている。そしてそのような彼自身の姿勢について「理由付け」の項で次のように記している。

「自分が何かの知識や洞察に至った過程を他のどんな方法より良いと考え、後に続く人たちをその方向に導き、教えたいと思うことは見受けられることである。この意味で私はピエトロ・デラ・ヴァレについて詳しく述べたのであったが、それは彼がオリエントの特性を最初に、最も明確に私に明らかにしてくれた旅行家だったのであり、私の偏見かもしれないが、ピエトロ・デラ・ヴァレの記述によって初めて私のディーヴァーンのための独特な基盤が得られたように思われるのである。このことが他の人々に新聞や雑誌類が多く出回っているこの時代に大型本を通読する気持を起こさせて欲しいものであり、それによって人々は明らかに優れた世界に到達することになるであろう、この世界は最近の旅行記の中で表面的には違っていても根本的にはあの優れた人の前に彼の時代に現れたと同じものとして現われることであろう。

詩人を理解したいと思う人は
詩人の国に行かねばならぬ
彼はオリエントの地で味わってきて欲しい
古いものが新しいものだということを」[20]

16番目の詩にも題は付されていない。

いとしい恋人よ、あなたに
ボハーラやサマルカンドを贈るのに
私にためらいなどがあるだろうか
これらの町々の熱狂やがらくたも含めて

しかし一度皇帝に尋ねて見てください
彼がそれらの町々を与えるかを
彼はずっと立派でずっと賢いです
でも彼は愛するすべを知りません

支配者よ、あなたはこのような贈物を
決して決心なさらないでしょう

このような恋人を持たねばならないのです
たとえ私のように乞食になっても[21)]

制作は1815年2月17日[22)]。ヴィースバーデン目次表では「競り勝ち＜Überboten＞」となっている。なお、この詩の2行目はこのミュンヒェン版では

＜Bochara und Samarkand,＞

となっているが[23)]、そうではなく

＜Balch, Bochara, Samarkand,＞

としている版もある[24)]。

この詩にはハマー＝プルクシュタルの独訳『ハーフィズ詩集』の序文中の次の部分が手がかりになっている。

「ティームールがファルスを征服し、ムザファル朝の最後のスルタンを処刑したとき、ハーフィズは未だ存命中であった。彼は詩人を呼びつけ、ハーフィズが現われたとき言った。『わしは輝ける剣で世界の大部分を征服し、何千もの国々をわしの支配下におき、わしの祖国の二つの都市サマルカンドとブハーラーを他のどの都市よりも栄える都市にした、それなのにお前はお前の詩の中で恋人のほくろのためならサマルカンドとブハーラーを差し出してもよいと言っているではないか』と詰問した。それに対してハーフィズは大地にキスをして言った『世界の主よ、どうかこの浪費者を御覧下さい、そうすればこのような惨めな状態に陥った私をお許しくださるでしょう』と。この答えが征服者を喜ばせ、ティームールは怒る代わりに恩寵を与えて許した。」[25)]

また、『ハーフィズ詩集』中の本文でこの詩が掲載されている部分の脚注で次のようなエピソードを紹介している。

ハーフィズに敵意を抱く者たちがこの詩句のことで、ティームールが支配する二つの非常に見事な都市をお気に入りの美少年のホクロのために犠牲にしていまうほど軽くみていると言って、彼をティームールに中傷した。それを聞いたティームールはハーフィズを呼んで「私はサマルカンドもブハーラーも与えるだろう＜Bachshem Samarkand u Bucharara＞」という詩句について詰問する。それに対してハーフィズは非常に冷静にそして気付かれぬように細心の注意を払って、語を一寸変えて「私はブハーラー産のキャンディーを二つ与えるだろう＜Bachshem du ser kandi bucharara＞」と答えたという。そこで、ティームールの方もその無実を認め、その巧みな思いつきを賞賛したという。[26)]

なお、この詩の最後の節は『ハーフィズ詩集』中の

Du veracht` nicht Liebesbettler
Diese Leute
Sind Monarchen ohne Kronen,
Ohne Thronen
（貧しい恋する男を卑しむなかれ
これらの者は
王冠もなく
王位もない帝王なのだ）[27)]

とも関連付けられる。

17番目の詩にも題は付されていない。

美しく書き上げられ
黄金で華麗に縁どられた
思い上りの詩編に

あなたは微笑んでくれた
あなたの愛についての
また、あなたによって幸運に恵まれた
私の成功についての私の思い上がりの自讃を
あなたは許してくれた

自画自賛、これは妬みごころに対してのみ
悪臭となるが
友人や得意な趣味にとっては
快い香りだ

生きる喜びは大きい
生きることに対する喜びはもっと大きい
ズライカよ、あなたが
私を極度に幸せにしてくれるなら
あなたの情熱を私に
まるでボールのように投げてくれるなら
私はそれを受け止め
あなたに捧げる私の自己を
あなたに投げ返します
それは一瞬のこと
その後はある時はフランク人が
またある時はアルメニア人があなたから私を引き離します

しかし日々が経過し歳月が過ぎると
私はいまや幾重にも
あなたの無尽蔵なゆたかさを汲み上げます
ズライカよあなたによって千本もの糸で
くるまれたこの私の幸せの
様々な色のひもを私はほどきます

それに対していまここに
詩の真珠が用意してあります
それらはあなたの情熱に対する
私の激しく砕ける波が
人生の
荒れ果てた渚に
勢いよく打ち上げたものです
鋭い指先で
きちょうめんに拾い集めて
宝石をちりばめた金の飾りに連ねて
あなたの首に
あなたの胸に着けてください
控えめな貝の中で成熟した
アッラーの雨の滴を[28]

ゲーテ全集のミュンヒェン版（M.A.）の＜Divan-Jahre 1814-1819＞にあるこの詩の末尾に＜H.21.S.1815＞とある[29]ようにハイデルベルクでの作である。ゲーテは1815年9月15日から18日までゲルバーミューレに滞在した後18日の午後4時半にフランクフルトを出発し、ダルムシュタットに南下し、そこに2日間程滞在し、20日の朝6時ころダルムシュタットを立って午後1時ころハイデルベルクに到着している。上の詩はその翌日に制作されたもので別れた恋人への強い思いを感じさせるものとなっている。

なお、この詩のなかで「詩の真珠」という表現があるが、詩を真珠に喩える表現はハーフィズのなかにも見受けられていて、それを受けてハマー＝プルクシュタルも『ハーフィズ詩集』の序文の中でも「これらの真珠が紐に連ねられてかれの同時代の人々の首飾りとなって欲しい」[30]というように用いている。

ハマー＝プルクシュタルの独訳『ハーフィッズ詩集』の「タ一章」47番目の詩の中には「自然が彼に与えた真珠の首飾り（diese

Perlenschnur/ So die Natur ihm gab)」[31]という詩句が見られ、「ダル章」の108番目には次のような詩句がある。

Als der Verse Hafisens undurchbohrte Perlen
Schöner glänzten, durch deine Pfleg' verbeßert, Erinnere dich.[32]

（ここの部分の邦訳『ハーフィズ詩集』では以下のようになっている

「想い起せ、ハーフィズの粗削りの宝石の詩は
そなたの磨き上げでまともになった[33]」）

この詩が制作された2日後の9月23日にゲーテからすると思いがけずマリアンネが夫ヴィレマーとシュテーデル夫人と共にハイデルベルクにやって来た。その日から3人が去る9月26日までマリアンエに取っては至福の、ゲーテに取っても快い日々が経過していく。9月26日マリアンネはフランクフルトでの再会を願って別れていくのだが、それが果たせず、この時が最後の別れとなる。10月7日ゲーテはボワスレーと共にハイデルベルクを立つのだが、フランクフルトの方へは向かわずに、ネッカールエルツを経てヴュルツブルクに行き、ヴュルツブルクでボワスレーと別れ、ヴァイマルに向かってしまうのである。

注

1）Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke nach Epochen Seines Schaffens, Münchner Ausgabe, hrsg. von Karl Richner（以下M. A. とする）, Bd.11.1.2. S.71
2）M.A.Bd.11.1.1, S.119.
3）M.A. Bd.10. S.222.
4）M.A.Bd.11.1.2. S.72.
5）M.A.Bd.11.1.1, S.123.
6）Im Namen Goethes, Der Briefwechsel Martianne von Willemer und Herman Grimm, Herausgegeben und eingeleitet von Hans Joachim Mey, Insel Verlag, Frankfurt am Main 1988.. S.230.
7）『ハーフィズ詩集』、黒柳恒男訳、平凡社、東洋文庫299、171ページ。
8）同上、173ページ。
9）同上、207ページ。
10）M.A.Bd.11.1.2. S.186f.
11）ibid.S.72.
12）『図説世界シンボル事典』（2000、八坂書房）の「太陽」の項では「社会秩序が男性に支配されてきたことを反映して、太陽はたいてい「男性」と見なされ（ただしドイツ語の名詞「太陽」（Sonne）の文法上の性は女性である）、またそれにともなって、太陽神もふつうはやはり男性としてイメージされる（これも例外があり、たとえば日本の神話には太陽女神アマテラスが登場する。ただしこの神には天の神イザナギの被造物という側面もある）。」とあり（237ページ）、「月」の項には「月はたいてい「女性」と解釈される。また絶えず満ち欠けを繰り返しては生まれ変わるので、さまざまな「死と再生」の観念を強く印象づけるシンボルにもなっている。ドイツ語圏では、月が男性として扱われることもある（ドイツ語では名詞「月」の文法上の性は男性、また北欧神話でも、月を擬人化した存在であるマーニは男性で、太陽ソール（南ゲルマンではスンナ）はその妹とされている）が、これはあくまで例外で、女性とされることの方が圧倒的に多い」とある（258ページ）。
13）Marianne und Johann Jakob Willemer Briefwechsel mit Goethe Dokumente・Lebens-Chronik・Erläuterungen. Herausgegeben von Hans-J. Weitz, S.147.
14）ibid. S.421.
15）M.A.Bd.11.1.2. S.73.
16）M.A.Bd.11.1.1. S.91
17）M.A.Bd.11.1.2. S.612.

18) ibid. S.73f.
19) M.A.Bd.11.1.1. S.99.
20) .M.A.Bd.11.1.2. S.250.
21) ibid. S.74f.
22) M.A.Bd.11.1.1. S.100.
23) 他に、初版本（1819）、記念版（Jubiläumsausgabe,Bd.1, Gedichte West-östlicher Divan, Darmstadt,o.J.）、がこれと同じ。
24) Goethes Werke, Festausgabe, Bd.3, West-östlicher Divan, Bearbeitet von Rudolf Richter., Meyers Klassiker-Ausgaben, Leipzig, 1826-1926 Berliner Ausgabe, Goethe Poetische Werke, Gedichte und Singspiele Ⅲ, West-östlicher Divan/Epen, Berlin und Weimar,1973
Hamburger Ausgabe,hrsg, von Erich Trunz,
など。
25) Mohammed Schemsed-din Hafis Der Diwan / Aus dem Persischen zum erstenmal ganz übersetzt von Joseph von Hammer-Purgstall. 1973 / Georg Olms Verlag.（以下Hammer-Hafisとする）Bd.1,S.XVIf.
26) ibid.S.13f.
27) ibid.S.244.
28) ibid.S.75f
29) M.A.Bd.11.1.1. S.122.
30) Hammer-Hafis Bd. I . S.XIV.
31) ibid, S.117.
32) ibid.S.364..
33)『ハーフィズ詩集』、黒柳恒男訳、平凡社、東洋文庫299、150ページ。